

社会的態度に関する一研究

—— (2)意味分析に表われたある緊急
事態における学生の社会的態度 ——

原 一 雄

I 問 題

ある集団の構成人員が持つ社会的認知は、その集団の占める社会的地位と、その時に与えられた役割りと共に変容し、時には更にこの変容が、その集団の果たした役割りを一層助長させる前提条件の一つとなることが、民族集団の持つ偏見を通して明らかにされた。(Hara, 1961 ; 原, 1962) それ故に、原因でもありまた結果ともなりうる社会的認知作用と行動面との関連を、ある社会的状況の中に捕え、それらの力動性を解明せんと試みたのが本研究の目的である。

具体的には、今春本学において、不祥にも起った授業料値上げ反対運動期間中に表明されたところの学生の意識的態度に対し、同時に行われた意味分析法 (Semantic differential method) による態度測定の結果を分析して、如何なる次元において、社会的態度に含まれる認知作用の活性化が具現されるかをつきとめようとしたものである。

II 方 法

被調査群と調査時期：1962年10月、一般心理学を受講していた当時2年又は3年在籍の女子学生20名（以下 '62年群と呼ぶ）と、1963年6月初旬、授業料値上げ反対第2回授業放棄突入直後に、1年生19名と4年生18名（内前回の被験者9名を含む）計37名のいずれも女子学生（以下 '63年群と呼ぶ）から回答を求めた。

調査用紙：Osgood(1957)の方法に従い、被験者に刺戟語から受ける印象の程度を、両極端を示す対の形容詞の間に設けられた7段階の回答欄に、×印をもって示させた。

刺戟語は、'62年群に対しては20項目、ただし本研究に使用したものは、その中の「サラリーマン」、「学生」及び「ICU」の3項目、'63年群に対しては、それら3項目に「理想のICU」を加えた。

Table 1 に示された50対の形容詞の内、**道徳的評価因子**に1, 14, 15,

Table. 1 The Pairs of adjectives employed for semantic differential method.

1	正確な	—	不正確な	26	卑俗な	—	神聖な
2	深い	—	浅い	27	四角い	—	丸い
3	柔い	—	固い	28	劣った	—	優れた
4	素早い	—	のろい	29	熱い	—	冷い
5	騒がしい	—	静かな	30	矛盾した	—	貫した
6	新鮮な	—	腐った	31	遅い	—	速い
7	強い	—	弱い	32	危険な	—	安全な
8	快い	—	不快な	33	澄んだ	—	にごった
9	勤勉な	—	怠惰な	34	重い	—	軽い
10	厚い	—	薄い	35	芳ばしい	—	いやな臭の
11	民主的な	—	非民主的な	36	不完全な	—	完全な
12	綺麗な	—	汚い	37	鋭い	—	鈍い
13	豊かな	—	乏しい	38	良い	—	悪い
14	価値ある	—	無価値な	39	近い	—	遠い
15	間違った	—	正しい	40	はっきりした	—	ぼんやりした
16	長い	—	短い	41	能動的な	—	受動的な
17	束縛された	—	自由な	42	幸福な	—	悲しい
18	消極的な	—	積極的な	43	下品な	—	上品な
19	派手な	—	地味な	44	動いている	—	止っている
20	新らしい	—	古い	45	不健康な	—	健康な
21	弛んだ	—	緊張した	46	正直な	—	不正直な
22	小さい	—	大きい	47	甘い	—	苦い
23	美しい	—	醜い	48	充実した	—	空の
24	愚な	—	賢い	49	争いがちな	—	平和な
25	親切な	—	不親切な	50	公平な	—	不公平な

25, 26, 28, 30, 36, 38, 46 の10対, **知覚的評価因子**に3, 12, 17, 27, 29, 33, 35 の7対, **社会的評価因子**に9, 24, 43, 45, 49, 50 の6対, **情動的評価因子**に6, 8, 20, 23, 42, 47 の6対, **能力因子**に7, 10, 21, 22, 34, 40, 41, 48の8対, **活動因子**に5, 11, 19, 32, 39, 44の6対,

計43対の形容詞を本研究に使用した。これらの形容詞の対は、いずれも日本語の意味構造の分析研究(Oyama etc., 1962 ; Sagara etc., 1961 ; Tanaka, 1962) に使用されたものであり、上記6つの因子も、同じくこれらの研究中に抽出されたものである。Osgood (1957), Kumata その他(1956) らの研究資料を参考にした上、各因子の負荷量を、比較的純粋に、且つ多量に持った形容詞の対を選び出した結果であり、残りの7項目は主として力動性因子と称せられ、能力因子と活動因子の複合と考えられるものであるが、既存の研究が必ずしも一致しない所から、本研究においてはこれらを除外した。

III 結 果

各被調査群の各因子に対する反応を、群総員がある因子を代表する全ての形容詞の対に対して与えた回答の平均評価尺度値 (mean scale value) で表わした。

Fig. 1は、刺戟語「サラリーマン」並びに「学生」に対する'62年群と、'63年群の1年生並びに4年生の反応を示す。Fig. 2は、現実の「ICU」に対する上記3群の反応と、'63年群の「理想のICU」に与えた反応を示す。両図とも、各因子について左側を積極的、右側を消極的な反応とし、

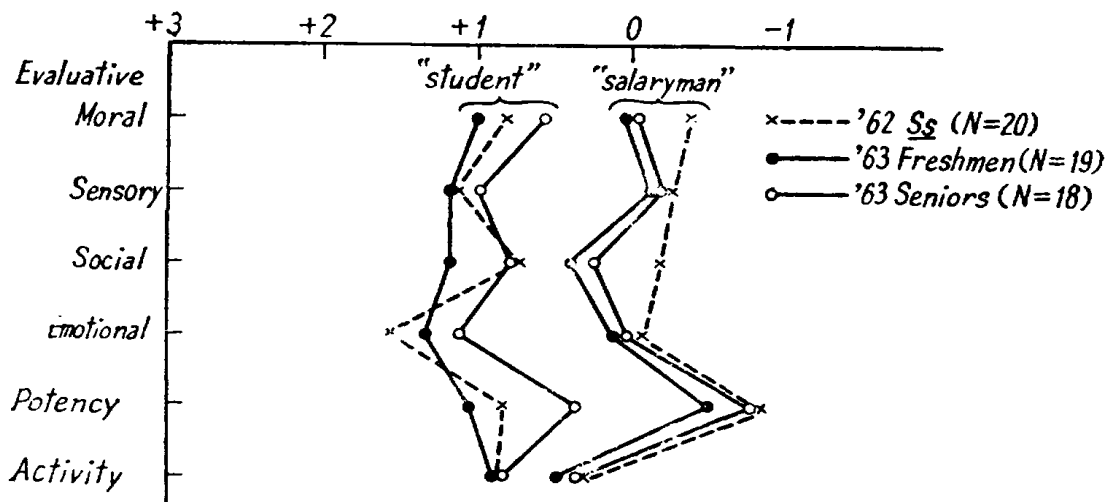


Fig. 1 Mean scale values of "Salaryman" and "Student" for each factor

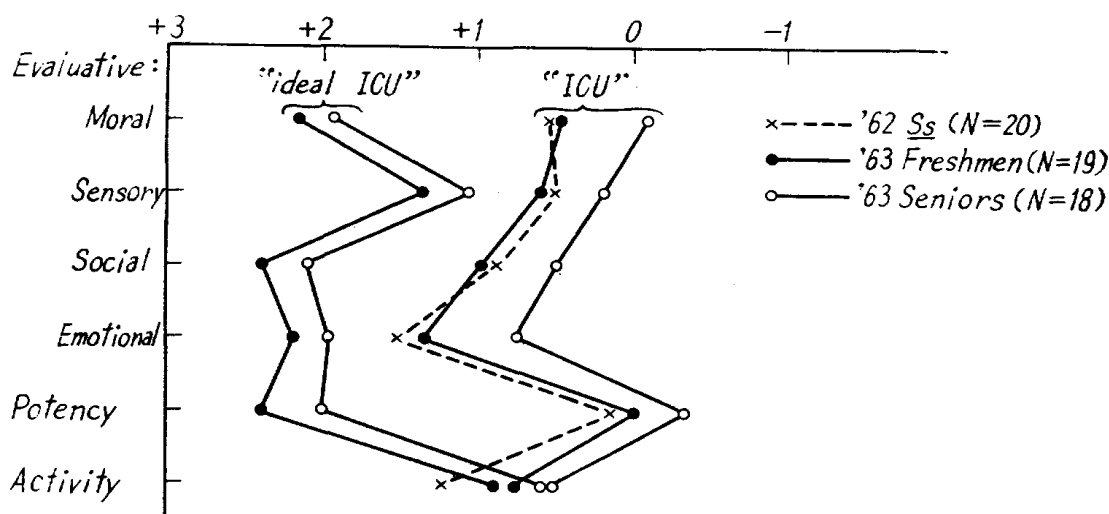


Fig. 2 Mean scale values of "ICU" and "ideal ICU" for each factor

0 点をもって中立的態度としてある。

被調査群間，あるいは刺戟語間の反応の差の有意性は，その顕著なもののみ次章考察のところでは触れている。

IV 考 察

Fig. 1 並びに Fig. 2 から，態度の測定に用いられた意味分析法の持つ高い信頼性が指摘されよう。使用された各々の刺戟語に対して，異った時期と社会的状況において，異った被調査群，しかも比較的少数の被験者を対象としたにもかかわらず，極めて恒常の反応が示されている。すなわち，各群の評価尺度値が同程度であるばかりでなく，6 因子間の反応形式もまた著しく一致している。この事実は，とりも直さず，行動面において平常とは非常に異った社会的態度，すなわち，授業放棄に見られた学生対大学行政当局と云った対立的態度を見せたにもかかわらず，「学生」・「ICU」と云う言葉の意味においては，平常時と緊急事態との間に左程の変化が見られなかったことを明らかにしている。

'62年群と '63年群とを比較した所，その差は有意ではなかったが，「サラリーマン」の道徳的評価と社会的評価が共に '63 年群に於て積極性を増し，「ICU」の活動性が消極的に反応されている。その他については大差な

く、「ICU」について'62年群が'63年群の1年生と非常に似た評価尺度値を持っていることが指摘されるに止まる。

'63年群の内、1年生と4年生とを比較した所、後者が総ての刺戟語、総ての因子次元において、例外なく消極的に評価していることが判った。この傾向の最も顕著に表われているのは、「ICU」の評価的諸因子と「学生」の能力因子である。

以上の学年別による反応の差異は、在籍年数が増え、卒業が間近に迫るに従い、今迄に蓄積された各種の欲求不満が、自己、すなわち「学生」、及び自己をとりまく環境、すなわち「ICU」に対する認知を、左程積極的に評価すべきものではないとする所の、一種の防衛機構と解釈はできないであろうか。「理想のICU」に対する反応からうかがわれる彼等の期待も同じ傾向を示していることは、未熟な過大的期待から現実的な可能性の判断へと移行して行く現象と受けとられるものの、欲求不満の原因となり得ることにおいては同じである。

刺戟語間の差異から、被調査群のもつ認知「場」における二つの概念の心理的位置が測られる。「サラリーマン」と「学生」とを比較すると、前者の全面的消極性に対する後者の積極性が一見して判り、更に両者間の距離も、1年生より4年生がより短く認知していること、すなわち、心理的により身近なものとして受容していることが我々の興味をひく。

現実の「ICU」は、丁度前述兩者の中間に位置づけられており、「学生」と云う概念と一致しないばかりでなく、より積極的に「学生」の目標となり得なかつた所に、今回の不祥事件を作り出す基盤が横たわっていたのかも知れない。特に能力因子において、「学生」と「ICU」との間に大差を見たことは、当大学の主張する「明日の大学」と云う可能性を否定したこととして、関係者の考慮すべき点であろう。

「理想のICU」と「学生」との間には、知覚的評価因子と活動因子以外に大きな差が存在し、「理想のICU」と現実の「ICU」との間にはより一層の差が開いている。特に後者の場合、道徳的評価、社会的評価、

能力の諸因子に大差が見い出されたことは、とりも直さず、学生の本学に抱く期待の中に、道徳的な厳しさと実際社会への積極的な関心を求める希望がうかがわれ、現在は否認しつつも、是非将来において母校が発展する可能性を持って欲しいと願う態度が推察されないだろうか。

なお、一言補足すれば、ここに用いた資料は、総て現象学的認知を客観的に捕捉せんと試みた分析の結果であり、それらの妥当性については一切不問である。しかしながら、本研究が対象とした事件の如く、実際の行動が社会的認知の妥当性の如何にはかかわりなく、むしろ認知作用の伴う力動性に原因を持つと考えられる時、すなわち、各個人の現象学的認知「場」に於ける、期待と主観的現実把握の差より生ずる欲求不満が、社会的に異常な行動を発生させたと考えられる場合、これに対処する方策も自ら明らかになるであろう。事実に関するより正しい情報を与え、現在における可能性の限界をより現実的に示すと共に、当事者は更に集団の持つ将来に対する期待に添って、積極的に方針を建てて事務を処理せんとする所謂前向きの姿勢を示すことにより、彼等の現状認識が認知「場」において積極面へと移動し期待への歩み寄りを起せば、必ず緊急事態は好転するであろう。

文 献

- Hara, K. A study of certain attitudes and their personality correlates among Japanese-Americans. *Educational Study*, 1961, 8, 163—211.
- 原 一雄：社会的態度の一研究——(1) Stereotypes を通して見た文化変容——教育研究, 1962, 9, 125—141.
- Kumata, H., and Schramm, W. A pilot study of crosscultural methodology. *Pub. Opin. Quart.*, 1956, 20, 229—237.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., and Tannenbaum, P.H. *The measurement of meaning*. Univ. Illinois Press, 1957.
- Oyama, T., Tanaka, Y., and Chiba, Y. Affective dimensions of colors : A cross-cultural study. *Jap. psychol. Res.*, 1962, 4, 78—91.
- Sagara, M., Yamamoto, K., Nishimura, H., and Akuto, H. A study on the semantic structure of Japanese language by the semantic differential method.

Jap. psychol. Res., 1961, 3, 146—156.

Tanaka, Y. A cross-cultural study of national stereotypes held by American and Japanese college graduate subjects. *Jap. psychol. Res.*, 1962, 4, 65—77

A Study of Social Attitude

(2) Students' Social Attitudes at an Urgency Measured by Semantic Differential Method

Kazuo Hara

(English Résumé)

Problem

This study attempted to explore certain functional characteristics of social attitude, specifically the dynamic relationship between its cognitive and behavioral aspects. Concretely stated, semantic differential method was employed for finding the dimensions on which social cognition activates extraordinary behaviors such as class boycottings by the students on the problem.

Method and Results

Three groups of Ss, 20 students in General Psychology at the fall term of 1962 and 19 freshmen and 18 seniors voluntarily responded for the study in June, 1963, were used. These groups were compared on 4 concepts, "salaryman", "student", "ICU" and "ideal ICU", with 50 pairs of adjectives representing 6 factors—moral-evaluative, sensory-evaluative, social-evaluative, emotional-evaluative, potency and activity. Mean scale values of those Ss groups on the factors for each concept are shown in Fig. 1 and 2.

Conclusions

1. Measures of social attitudes by semantic differential method are highly reliable.
2. Senior students tend to recognize all concepts used less positively. For them, the "student" is not so potent and the present "ICU" is not so valuable.
3. General responses for the "ICU" stand between ones for the "student" and the "salaryman" rather than between the "student" and the "ideal ICU".
4. Largest discrepancies between the "ideal ICU" and the present "ICU" or the "student" are found on the dimensions of moral-evaluative, social-evaluative and potency factors.
5. The above 3 and 4 indicate both the students' deep feeling of their frustration to the present campus life and the locus of their expectation and hope, which the administration should take into account for its leadership in future.